

2013年度 ITP-EUROPA 派遣報告書

氏名：水沼修（東京外国語大学博士後期課程）

派遣先：リスボン大学(ポルトガル)

派遣期間：2013年5月～2014年3月

派遣の概要：

2013年5月より約11ヶ月間、ポルトガルのリスボン大学博士後期課程において、博士論文研究テーマに係る調査研究を行った。同大学博士課程には、前回派遣時（2012年1月）に正式に入学が認められており、今回の派遣においても、本学とリスボン大学の間で締結予定の共同学位授与制度のもと、同大学文学部博士課程（ロマンス語学・一般言語学科）の Esperança Cardeira 先生（歴史言語学）及び Rui Marques 先生（意味論）に指導教員をご担当いただいた。

研究テーマ

博士論文研究テーマは「中世ポルトガル語の複合時制」であり、研究の主要目的は、大規模な資料体を利用し、中世及び16世紀以降のテキストに現れるポルトガル語の複合時制形式に関し、それぞれのテキストの文献学的性質を考慮した上で、個々の例を形式的・意味的側面に留意しつつ詳細に調査することによって同形式の発展のプロセスを跡付けることである。

派遣の目的

共同学位授与制度に基づき、文献学研究およびポルトガル語通史研究に関し、歴史と伝統があるリスボン大学の博士後期課程に入学し、博士論文を執筆する上で必要となる知識を習得する。また、同課程の指導教員による論文指導のもと研究を行うことで、博士論文の調査をより確かなものとする。

活動概要：

派遣先での主な活動は、図書館等での資料収集、指導教員との面談、博士論文の執筆作業であった。

資料収集

日本で閲覧することが困難または不可能な資料を中心に資料収集を行った。特に、ポルトガル語の複合時制を扱った学位論文（修士論文・博士論文）等、これまで調査が難しかった先行研究や最近発表されたばかりの研究等を閲覧・収集することができた。また、電子化コーパスに収録されているテキストの元資料に関し、その文献学特徴や校訂本の確認等の作業を行うことができた。これらの作業は、主にリスボン大学文学部附属図書館、国立図書館、国立古文書館等で行ったが、書店で入手可能な資料（校訂本等）の幾つかは、専門書を扱う書店・古書店等で購入することができた。また、派遣期間中には、2013年11月にグルベンキアン財団より刊行された『ポルトガル語文法（Gramática do Português）』の執筆を担当した研究者等と、自分の研究と関連のある分野について意見交換を行う機会に恵まれた。

博士論文執筆作業

指導教員の先生方のご指導のもと、今回の派遣では、次の三点に重点を置き、執筆作業を行った。

(1) 先行研究に関する章：特に本研究で考察の対象となる問題を具体的に明示することを目的に、諸研究で用いられている方法論やコーパス等を考慮した上で、現在までに明らかになっていること、いないことをきちんと整理する作業。

(2) データの抽出及び分析：特に「所有表現」における *haver/ter* の分布、「存在表現」に関する考察。

(3) 意味論的アプローチ：より客観的な分析を行うための方法論の確率（副詞との共起、前後に生起する動詞の時制、主語と動作主の関係、等）

使用するコーパス

本研究においては、電子化コーパスを調査の対象とする。それらは、主に13世紀から15世紀の文学テキスト及び非文学テキストが数十点収められている *Corpus Informatizado do Português Medieval* (ポルトガル・リスボン新大学)、1380年から1845年の期間に生誕した作家による作品が53点収録されている *Corpus Histórico do Português Tycho Brahe* (ブラジル・カンピナス大学)、16世紀から17世紀にかけての文学作品が数点収録されている *Corpus Eletrónico do CELGA - Português do Período Clássico* (ポルトガル・コインブラ大学)、16世紀から19世紀の期間に記された私用の書簡約2000点が収録されている *CARDS - Cartas Desconhecidas, Unknown Letters* (リスボン大学言語学センター) である。

派遣の成果：

本派遣を通じ、博士論文の先行研究の章の執筆、コーパスからのデータ抽出・分析作業に関し、それぞれ以下の様な作業の進捗が見られた。

先行研究

先行研究の章については、指導教員の先生方のご指導のもと、執筆を終えることができた。同章では、諸研究の紹介、各研究で用いられている用語・概念、各研究における *haver/ter+p.p.* の形態・統語論的及び意味論的特徴の記述、各研究における「*haver/ter+p.p.*=複合時制」の条件等を整理した上で、本研究で扱う問題をテーマごとに提示している。

データの抽出・分析

「*haver/ter+過去分詞*」については、電子化コーパスから該当例を抽出し、形態・統語論的特徴（過去分詞と直接目的語の性数一致、助動詞と過去分詞の間に挿入される要素の有無、形式を構成する各要素の語順）に基づく分類を行った。ただし、過去分詞の分類方法や、韻文テキストにおける語順の問題については、現在、指導教員の先生方と協議を行っているところである。

「所有表現」については、*Mattos e Silva (1996)* による分類をもとに、抽出したデータの分類を行った。ただし、この分類方法についても、見直しが必要と考えられるため、指導教員の先生方と協議を行っている。

今後の課題：

本派遣で得られた成果を踏まえ、博士論文執筆作業に尽力していきたい。特に、意味論的アプローチや、「所有対象物」の分類等、分析方法の検討を行う必要があるものについては、早急に対処したい。

今後の研究の流れとしては、「*haver/ter+過去分詞*」の形態・統語論的観点に基づく分類、及び意味論的観点に基づく分類、「所有対象物」の分類を行った上で、データの総合的な評価を行う。これらを通じて、ポルトガル語の複合時制の発展のプロセスをより詳細に記述することを目標に、論文執筆作業を行っていきたい。